

教師論		前期 2 単位	1年
教育とは何か、教師とは何か。		高橋 喜代治 (たかはし きよじ)	
ねらい	今日の教師に求められる資質と力量を明らかにし、それを身につけていくために必要な学びの計画・見通しが持てるようにする。		
授業計画	<p>【前期】</p> 第1回 子どもの発達と教師の役割 (心の成長①) 第2回 子どもの発達と教師の役割 (心の成長②) 第3回 子どもの発達と教師の役割 (分かる・できる①) 第4回 子どもの発達と教師の役割 (分かる・できる②) 第5回 知識・技能を身に付けていく学習 (授業づくり①) 第6回 知識・技能を身に付けていく学習 (授業づくり②) 第7回 知識・技能を身に付けていく学習 (学級指導①) 第8回 知識・技能を身に付けていく学習 (学級指導②) 第9回 知識・技能を身に付けていく学習 (教科外①) 第10回 知識・技能を身に付けていく学習 (教科外②) 第11回 教師としての生き方を考える学習 第12回 教師としての生き方を考える学習 第13回 学校という職場・教師の仕事 (教師の一日) 第14回 学校という職場・教師の仕事 (地域・保護者) 第15回 まとめ学習		
進め方	これまでの学生達の学校生活・学習経験を生かしながら、ワークショップ的に授業をすすめる。毎時間、授業を振り返るために、「授業コメント」を書く。適宜、学校現場の授業や行事などのビデオ等を見て分析、討論を行う。		
テキスト	特に定めない。毎時間プリントを用意する。また、必要に応じて参考文献を紹介する。	参考文献	特になし
評価方法	授業への参加態度:60% レポート:40%		

教育原理		前期 2 単位	1年
教育観・学校観・子ども観を問い直す		清水 康幸 (しみず やすゆき)	
ねらい	教職をめざすみなさんには、自らが経験してきた「教育」を相対化し疑ってみてほしい。なぜなら、今日ほど学校や教師、家庭や社会の、人間形成にとっての意味が問い直されている時代はないからである。授業を通じて、教育の原理と現実を突き合わせることで、自らの教育観・学校観・子ども観を問い直し再構成して欲しい。		
授業計画	<p>【前期】</p> 第1回 私の「教育」体験を問い返す 第2回 日本の学校制度 (1) 明治維新と教育 第3回 日本の学校制度 (2) 教育勅語の成立とその思想構造 第4回 日本の学校制度 (3) 天皇制公教育の構造 第5回 日本の学校制度 (4) 大正新教育と戦時下の教育 第6回 戦後教育改革の理念と教育基本法の成立 第7回 戦後教育の理念と実際 (1) 教育の理念 第8回 戦後教育の理念と実際 (2) 6・3制の理念と実態 第9回 戦後教育の理念と実際 (3) 男女共学・宗教教育 第10回 戦後教育の理念と実際 (4) 教育行政 第11回 現代教育の論点 (1) 教育課程のあり方……学習指導要領と教科書検定 第12回 現代教育の論点 (2) 授業とは何か……教育方法の原理 第13回 現代教育の論点 (3) 評価とは何か 第14回 現代教育の論点 (4) 教師の仕事と役割 第15回 試験		
進め方	講義を中心とするが、毎回感想・意見・疑問を書き次回に交流する方式をとるので、各自の主体的な参加を期待したい。		
テキスト	特に定めない。毎回資料を配付する。	参考文献	山住正巳著『日本教育小史』岩波新書／尾木直樹『子どもの危機をどうみるか』岩波新書など。その他、授業中に随時紹介する。
評価方法	試験:80% 出席:20%		

教育心理学		後期 2 単位	1年
教育心理学		田中 志帆（たなか しほ）	
ねらい	将来、教育現場に立った時の生徒指導、教科教育の役に立つような基本的な教育心理学知識について解説をします。教えること、教わることについて共に学びましょう。		
授業計画	【後期】 第1回 ガイダンス：教育心理学とは 第2回 発達と教育① 第3回 発達と教育② 第4回 特別支援教育・・・軽度発達障害について① 第5回 特別支援教育・・・軽度発達障害について② 第6回 動機づけと学習意欲 第7回 学習・問題解決① 第8回 学習・問題解決② 第9回 授業の形態、指導法：授業でどのように教えるか 第10回 教育評価とその方法 第11回 知能と知能検査とは何か？ 第12回 学級集団の心理① 第13回 学級集団の心理② 第14回 学校臨床・・・不登校とその援助 第15回 まとめ		
進め方	以上のトピックについて、1回～2回の授業を行います。また、時々ミニテストや実習を取り入れて、講義の理解を深められるようにしたいと考えています。		
テキスト	やさしい教育心理学 鎌原雅彦・竹綱誠一 著（有斐閣アルマ）1995円 その他、適宜プリントを配布します。	参考文献	
評価方法	出席：40% テストないしレポート：60%		

国語科教育法 I		前期 2 単位	1年
国語科の授業の創造		原 國人（はら くにと）	
ねらい	中学校国語科の授業を実践することができる基礎的な力を養うために、国語科に関する基本的な知識と授業の方法を探究する。		
授業計画	【前期】 第1回 国語教師とは何か 第2回 学習指導要領とは何か 第3回 作品を教材として読む 第4回 太宰治「走れメロス」を読む1 第5回 芥太宰治「走れメロス」を読む2 第6回 太宰治「走れメロス」の授業の指導案を書く1 第7回 太宰治「走れメロス」の授業の指導案を書く2 第8回 太宰治「走れメロス」の授業の指導案を書く3 第9回 模擬授業1 第10回 模擬授業2 第11回 模擬授業3 第12回 芥川龍之介「羅生門」を読み授業を考える1 第13回 芥川龍之介「羅生門」を読み授業を考える2 第14回 芥川龍之介「羅生門」を読み授業を考える3 第15回 国語教育史のホットポイント		
進め方	講義が中心となるが、教材＝学習材を基にした模擬授業を複数回実施する。そのためには、受講者が学習指導案を構築することが必須の条件であり、積極的に授業に参加することが望ましい。模擬授業においてはディベートやグループ学習なども採りあげる。		
テキスト	教材＝学習材として「走れメロス」「羅生門」他を用いる。	参考文献	授業中に随時紹介する。
評価方法	模擬授業：30% レポート：40% 平常点：30%		

国語科教育法Ⅱ		後期 2 単位	1年
国語教材論		原 國人（はら くにと）	
ねらい	国語科教育法Ⅰの上にならって、中学校国語科の授業において取り扱う古典教材＝学習材についての基礎的な理解を深める。		
授業計画	【後期】 第1回 古典教材の意義（学習指導要領の読み込み） 第2回 古典教材を読む 第3回 「伊勢物語」を読む1 第4回 「伊勢物語」を読む2 第5回 「伊勢物語」を読む3 第6回 古典補助教材の作り方（情報機器を利用して） 第7回 「伊勢物語」の指導案を書く1 第8回 「伊勢物語」の指導案を書く2 第9回 模擬授業1 第10回 模擬授業2 第11回 「万葉抄・古今・新古今」を読む 第12回 「平家物語」を読む・音読指導の実際 第13回 「奥の細道」を読む・含む連歌・発句・俳句の指導 第14回 国語教師の役割と使命 第15回 教育実習をどう乗り切るかーまとめに代えて		
進め方	教室で古典教材を扱うための基礎的な知識、技能を修得するために、演習を中心とし、模擬授業では積極的に授業の創造を試みる。		
テキスト	学習指導要領・資料配付	参考文献	授業中に随時紹介する。
評価方法	模擬授業:30% レポート:40% 平常点:30%		

英語科教育法Ⅰ		前期 2 単位	1年
英語教育の理論と実践Ⅰ		黒岩 裕（くろいわ ゆたか）	
ねらい	中学生に英語を教える際に必要となる実践的な知識や技能を習得することがこの授業の主なねらいです。同時に、日本の英語教育を振り返り、どのような英語の授業を提供すべきかを考えます。		
授業計画	【前期】 第1回 インTRODクシヨンー授業に関する説明 第2回 英語教育の目的：一般的な目的と固有の目的 第3回 英語教育の目的：学習指導要領における目的 第4回 自分が今まで受けて来た英語の授業を振り返る 1 第5回 自分が今まで受けてきた英語の授業を振り返る 2 第6回 様々な英語教授法 1 第7回 様々な英語教授法 2 第8回 様々な英語教授法 3 第9回 コンピュータと英語教育 第10回 4技能の習得 1 第11回 4技能の習得 2 第12回 語彙・文法の教え方 第13回 コミュニケーション能力 1 第14回 コミュニケーション能力 2 第15回 前期試験		
進め方	講義を中心に授業を進めますが、学生の皆さんの発言や質問も歓迎します。講義だけでなく、授業の実演を行ったり、関連するビデオなども利用します。適宜、小テストで、既習事項の確認を行います。		
テキスト	村野井他著『実践的英語科教育法』（成美堂）	参考文献	授業中に適宜紹介します。
評価方法	出席と授業参加:20% 課題・小テスト:40% 試験またはレポート:40%		

英語科教育法Ⅱ		後期 2 単位	1年
英語教育の理論と実践Ⅱ		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
ねらい	中学生に英語を教える際に必要となる実践的な知識や技能を習得する事が主なねらいです。同時に、日本の英語教育を振り返り、どのような英語教育を提供すべきかを考えます。		
授業計画	【後期】 第1回 英語習得について 第2回 英語教育の題材について 1 第3回 英語教育の題材について 2 第4回 指導案の作成 1 第5回 指導案の作成 2 第6回 中学校の英語教員による講演 第7回 模擬授業 1 第8回 模擬授業 2 第9回 英語教師論 第10回 英語学習者論 第11回 英語教育と国際理解教育 第12回 早期英語教育 第13回 評価とテストの方法について 第14回 後期のまとめ 第15回 試験		
進め方	講義を中心に授業を進めますが、皆さんの発言や質問も歓迎します。講義だけでなく、授業に関連するビデオなども利用します。後期は、授業で学んだ事をもとに指導案を作成し、実際に英語の授業を実演してもらいます。適宜確認の小テストも行います。		
テキスト	村野井他著「実践的英語科教育法」(成美堂)	参考文献	授業中に適宜紹介します。
評価方法	出席と授業参加:20% 課題・小テスト:40% 試験またはレポート:40%		

家庭科教育法Ⅰ		前期 2 単位	1年
家庭科教育の理論と実践(理論編)		安藤 美紀子(あんどう みきこ)	
ねらい	技術・家庭の家庭分野では、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てることをねらいにしている。本科目ではそれらの指導目標や指導内容をもとに指導案の書き方とホームプロジェクトについて学習し、教師としての資質を養		
授業計画	【前期】 第1回 家庭科教育法授業予定、小・中・高校の家庭科について 第2回 家庭科教育の目標、学習指導要領の読み方 第3回 学習指導要領と教科書の関係、年間指導計画の作成 第4回 指導方法、評価方法、学習指導案の書き方の説明 第5回 ホームプロジェクト(HP)の説明 第6回 食生活の学習、指導案例、HP例 第7回 衣生活の学習、指導案例、HP例 第8回 住生活の学習、指導案例、HP例 第9回 幼児・家族・地域の学習、指導案例、HP例 第10回 消費と環境の学習、指導案例、HP例 第11回 2003年のHPビデオ視聴、ビデオ視聴の感想 第12回 全国大会のHPビデオ視聴、各自HPの計画書作成 第13回 HP実施計画書の確認、HPの夏休み実施について 第14回 前期定期試験の説明 第15回 前期定期試験		
進め方	「学習指導要領」「教科書」「テキスト家庭科教育」の講義と学習指導案例 HP実践例の配布した資料をもとに意見交流をする。HPのビデオ視聴をもとに感想を書き、HP実施計画を立てる。夏休みにはHPを実施し、夏休み中、3回、教師にメールで経過報告をする。		
テキスト	①『テキスト家庭科教育』家政教育社 ②中学校学習指導要領解説—技術・家庭編— ③教科書 新しい技術・家庭 家庭分野 東京書籍 ④教科書 開	参考文献	その他 授業時に随時紹介する。
評価方法	前期定期試験:40% HP計画書:20% レポート:30% 授業の参加度:10%		

家庭科教育法Ⅱ		後期 2 単位	1年
家庭科教育の理論と実践（実践編）		安藤 美紀子（あんど う みきこ）	
ねらい	前期の理論編のねらいをもとに実践力を養う。HPの発表会を通してHP実施方法の研究をする。学習指導案・教材・教具を工夫して学生が独自の模擬授業をする。模擬授業をもとに、自己・相互・教師の評価、ビデオ撮影等を参考にしよりよい授業を研究する。学習指導案の作成や教材作成にあたっては、情報機器を活用することに留意する。		
授業計画	【後期】 第1回 HPの発表会、父母の参加希望者の案内 第2回 H Pの発表会、H P相互評価、レポート提出 第3回 第1回模擬授業1人20分 自己・相互・教師の評価 第4回 同上 第5回 同上 第6回 同上 第1回模擬授業の反省・評価 第7回 第2回模擬授業1人30分 自己・相互・教師の評価 第8回 同上 第9回 同上 第10回 同上 第11回 同上 第12回 同上 第13回 模擬授業の総括、後期定期試験の説明 第14回 家庭科教育の歴史と今後の課題について 第15回 後期定期試験		
進め方	HPの発表会を行い、父母に感想を書いてもらう。模擬授業を1人2回実施する。自己・相互・教師の評価、模擬授業のビデオ撮影を参考にしよりよい授業について意見交流をする。今後の教育課題について学習する。		
テキスト	前期と同様	参考文献	前期と同様
評価方法	後期定期試験:30% HP発表、レポート:30% 第1回模擬授業:20% 第2回模擬授業:20%		

道徳教育の研究		前期集中 2 単位	1年
道徳教育の可能性と限界を考える		内海崎 貴子（うちみざき たかこ）	
ねらい	「道徳とは何か。道徳は教えられるのか。」という問いから、道徳教育の可能性と限界を考える。具体的には、道徳の学習指導案作成を通して、授業として道徳を教えることの難しさ、道徳教育における教師の役割についての学ぶ。また、人権教育の学習では、差別体験授業に参加することで社会的規範意識の形成過程を確認し、人権感覚の向上を図		
授業計画	【前期】 第1回 オリエンテーション 第2回 道徳とは何か 道徳は教えられるのか 第3回 道徳教育の歴史 「道徳の時間」設置の経緯 第4回 現行学習指導要領における「道徳」の取り扱い 第5回 学習指導案とは何か 指導案の書き方 第6回 資料選択と教材のタイプ 教材の研究と作成 第7回 道徳性の発達① ビアジェ コールバーグ 第8回 道徳性の発達② キリガン アイゼンバーグ 第9回 授業方法研究① 道徳教育と人権教育 「差別体験授業」 第10回 授業方法研究② 「差別体験授業」の解説と討論 第11回 授業方法研究③ オーストラリアの人権教育VTR視聴 第12回 授業方法研究④ 前回のVTRの解説と討論 第13回 道徳教育における教師の役割① VTR視聴 第14回 道徳教育における教師の役割② VTRの解説と討論 第15回 学習指導案の提出と相互評価		
進め方	道徳の学習指導案を提出することが単位認定の条件である。前半は、学習指導案作成に必要な情報提供とスキルについての講義を行う。後半は、VTR視聴や差別体験授業への参加による具体的、実践的な道徳の授業方法研究である。参加体験型の授業形態であるから、欠席しないこと。		
テキスト	文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年。授業中に資料を多数配布するので、専用のファイルを準備すること。	参考文献	授業時に提示する。
評価方法	学習指導案:50% 授業参観の記録:30% リアクションペーパー:20%		

特別活動の研究		前期集中 1 単位	1年
生徒の人間性の育成をめざした特別活動の基礎理論の理解と実践力の育成		内海崎 貴子（うちみざき たかこ）	
ねらい	「特別活動」は、生徒の人間性（心身の調和のとれた発達と個性の伸長等）の育成と、集団生活を通して学級や学校生活の基盤づくりに重要な役割を果たしている。この「特別活動」の教育的意義や目標、内容および方法等について理論と実践の両面から研究を行う。		
授業計画	【前期】 第1回 「特別活動」の意義と目標 第2回 「特別活動」の歴史の変遷 第3回 「特別活動」の特質と内容 事例研究 第4回 学級活動・ホームルーム活動の指導 事例の収集 第5回 学級活動・ホームルーム活動の指導 グループワーク 第6回 学級活動・ホームルーム活動の指導 学習指導案作成 第7回 学級活動・ホームルーム活動の指導 模擬授業 第8回 学級活動・ホームルーム活動の指導 反省と討論 第9回 生徒会活動の指導 体験発表と討論 第10回 部活動 その役割と現状の検討 第11回 学校行事（1） 意義と課題 第12回 学校行事（2） 総合的な学習の時間とのかかわり 第13回 「特別活動」における教師の役割 第14回 「特別活動」の評価 第15回 特別活動の課題と展望 討論		
進め方	前半は、テキストと配布する資料に基づいた講義が中心となる。後半は、小グループによる資料と事例収集、討論、学習指導案の作成、模擬授業（学級活動・ホームルーム）実践を行う。「特別活動」の趣旨でもある、「授業への積極的な参加の姿勢」を最重視する。		
テキスト	文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編』平成20年9月	参考文献	授業中に提示する。
評価方法	リアクションペーパー:60% 平常点:40%		

生活指導論		後期 2 単位	2年
子どもたちが、人として豊に育つための生活のあり方		高橋 喜代治（たかはし きよじ）	
ねらい	この社会で、人が人として充実して生きていくとはどういうことなのか。どんな問題があり、どんな力が大切なのか。そこへ向かう指導の方法について追究する。		
授業計画	【後期】 第1回 教育実習の経験から学ぶ（ほめたこと・叱ったこと） 第2回 教育実習の経験から学ぶ（先生方の生活指導） 第3回 子ども親・発達親・指導親（生徒指導の留意点） 第4回 子ども親・発達親・指導親 第5回 学校の日常生活で学ぶこと（その1） 第6回 学校の日常生活で学ぶこと（その2） 第7回 民主的な生きる力（学級づくり） 第8回 民主的な生きる力（学校づくり） 第9回 異年齢集団と生きる力（部活動） 第10回 非日常的な生活で学ぶこと（その1） 第11回 非日常的な生活で学ぶこと（その2） 第12回 思春期の問題・課題（進路指導の視点から） 第13回 思春期の問題・課題 第14回 生き方学習（私を育てた人・もの・こと） 第15回 まとめ学習		
進め方	講義を發展させ、プレゼンテーションを行う。適宜、現場教師の学級や行事における生活指導のビデオ等を見て分析、討論を行う。ミニレポートを書く。		
テキスト	特になし。毎時間プリント資料を用意する。	参考文献	特になし。
評価方法	授業への参加態度:60% レポート:40%		

学校カウンセリング		前期 2 単位	2年
学校カウンセリング		田中 志帆 (たなか しほ)	
ねらい	現場の教育相談、生徒指導、進路指導に役立てられるような臨床心理学の基礎知識を学びます。教育実習時においても、カウンセリングマインドをもって生徒への対応が可能になるように、思春期・青年期に多く見られる心身の失調と対応についても解説します。		
授業計画	<p>【前期】</p> 第1回 生徒指導と教育相談（生活指導、保健室、適応指導教室） 第2回 進路指導のポイント 職能検査、進路指導の歴史と考え方 第3回 児童・生徒理解と対応①不登校 第4回 児童・生徒理解と対応②いじめ 第5回 児童・生徒理解と対応③青少年非行 第6回 児童・生徒理解と対応④発達しょうがい 第7回 児童・生徒理解と対応⑤学級崩壊 第8回 カウンセリング実習① 基本的かかわり技法 第9回 カウンセリング実習② 感情の反映技法 第10回 教育相談における知能検査、アセスメント法 第11回 思春期・青年期の心の問題①摂食障害 第12回 思春期・青年期の心の問題②境界性人格しょうがい 第13回 思春期・青年期の心の問題③統合失調症 第14回 スクールカウンセラーとの協働、コンサルテーション 第15回 まとめ		
進め方	講義形式ですが、学習ビデオを用いたカウンセリングのロールプレイ実習を行います。また学校現場でありがちな場面やケースを設定した実践プリントを配布し、生徒への対応や、よりよい指導のあり方とは何かの考察を深めます。		
テキスト	予定 「教育臨床論」伊藤直樹編著 批評社（来年出版予定）	参考文献	スクールカウンセリング 岡堂哲雄編 新曜社 2400円 学校に生かすカウンセリング 渡辺三枝子編著 ナカニシヤ出版 2000円
評価方法	出席:40% レポートないしテスト:60%		

教職総合演習		後期 2 単位	2年
子どもの人権を考える—世界と日本から—		清水 康幸 (しみず やすゆき)	
ねらい	1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」を中心的素材として、地球的規模での子どもをめぐる諸問題を考察し、世界と日本における子どもの権利の行方を探っていく。テーマとしては、難民、少年兵、飢え・病気・栄養失調、児童労働、ストリート・チルドレン、非識字、失業、児童虐待、性的搾取、ドラッグ、体罰、等々が考えられる。		
授業計画	<p>【後期】</p> 第1回 序論 第2回 「子どもの権利条約」の成立過程 第3回 「子どもの権利条約」の思想 第4回 学生による発表 第5回 学生による発表 第6回 学生による発表 第7回 学生による発表 第8回 学生による発表 第9回 学生による発表 第10回 学生による発表 第11回 学生による発表 第12回 学生による発表 第13回 学生による発表 第14回 まとめ（1） 第15回 まとめ（2）		
進め方	講義の他、学生による発表を重視する。発表内容は、選択したテーマに関して①実態、②世界と日本の取組み状況、③今後の課題、を含むものとし、発表方法としては、文献資料、映像資料等を活用し、「授業」を行う形をとる。そのため、各自の問題意識に基づく調査とまとめ作業が重要となる。		
テキスト	永井憲一・寺脇隆夫編『新解説 子ども権利条約』日本評論社	参考文献	各種文献の他、雑誌論文、新聞記事など適宜利用する
評価方法	期末レポート:50% レポート発表:30% 出席:20%		

教職総合演習		後期 2 単位	2年
日本と世界の食文化，食生活について考える		田中 志帆（たなか しほ）	
ねらい	日本では、この上なく食生活が豊かになり、日々飢えをしのぐ人は少ないかもしれません。それゆえに食物が持つ本来の意味、即ち人のこころも身体も育む栄養素としての意味を実感せずにいる大人も子どもも多いかもしれません。国内外の食糧事情を調べ、摂食障害など、食に関する疾患の予防教育を考えます。そして総合的な学習の時間に役立てま		
授業計画	【後期】 第1回 オリエンテーション 第2回 日本の食卓 身のまわりについて考えてみよう 第3回 学校給食かお弁当か（討論）・国連による食糧援助 第4回 世界の食生活、食文化、食糧事情①（学生による発表） 第5回 世界の食生活、食文化、食糧事情②（学生による発表） 第6回 世界の食生活、食文化、食糧事情③（学生による発表） 第7回 世界の食生活、食文化、食糧事情④（学生による発表） 第8回 世界の食生活、食文化、食糧事情⑤（学生による発表） 第9回 日本国内の食生活の違い（学生による発表） 第10回 これまでのレポート内容についてディスカッション 第11回 発達と食事 乳幼児 第12回 発達と食事 児童期・青年期 第13回 発達と食事 老年期 第14回 精神的な失調と食事（講義） 第15回 まとめ		
進め方	数回の講義と、学生による発表を中心にして授業を行います。興味関心のあるテーマについて、積極的に各自調べ、自分の考えをまじえて発表して下さい。また討議も楽しい授業にしていきましょう。		
テキスト	特にさだめません	参考文献	適宜紹介します
評価方法	平常点:50% レポート:50%		

教職総合演習		後期 2 単位	2年
ジェンダーと教育		藤田 和美（ふじた かずみ）	
ねらい	男女共同参画社会の実現に向けて、ジェンダーの再生産装置としての従来の学校教育のありかたを問い直し、性別が「リ」にとらわれない教育を目指す教育実践について学ぶ。現在新たな教材や指導の「プログラム」の開発が進む一方で、ジェンダー・フリーという用語をめぐる混乱も生じている。諸外国の動向をふまえて現代のこどもと暴力の問題につい		
授業計画	【後期】 第1回 ジェンダーとは 第2回 隠れたカリキュラムとこどもの意識調査 第3回 諸外国の教育① 第4回 " ② 第5回 " ③ 第6回 教科書分析① 第7回 教科書分析② 第8回 教科書分析③ 第9回 こどもと暴力① 第10回 こどもと暴力② 第11回 こどもと暴力③ 第12回 こどもとメディア① 第13回 こどもとメディア② 第14回 こどもとメディア③ 第15回 こどもとメディア④		
進め方	受講者の発表形式を中心に、参加者による集団討議をおこなう。		
テキスト	特に定めない。随時、資料をプリントして配布する。	参考文献	授業開始時に参考文献リストを配布する。
評価方法	レポート:40% 発表:40% 授業時の感想文:20%		

教育実習Ⅰ	後期 1 単位	1年
教育実習に向けて		
<p>【担当教員】 藏原 三雪（くらはら みゆき）、清水 康幸（しみず やすゆき）、田中 志帆（たなか しほ） ねらい：教育実習は、学校における教育実践（実習）に参加することを通じて、中学校教諭としての基礎的能力を養うとともに、教育についての実践的理解を深めることを目標とする。大学で学んだ理論をもとに、経験豊富な教諭の指導を受けて教壇実習を行なうもので、教職課程の総仕上げともいべき位置づけをもつ。</p> <p>授業計画：教育実習Ⅰは、2年次に行なわれる教育実習に向けた「事前指導」の一環であり、主な内容は次の通りである。 (1)教育実習に臨むにあたって必要な知識や心構えを学ぶ（学校の仕組み、教師の仕事、授業の準備や指導案の書き方、実習生として行動の仕方etc.）。 (2)グループに分かれて、学習指導案の作成や模擬授業を全員が行ない、教壇実習に向けての実践的訓練を行なう。 (3)実習経験者（2年生）や現職教師の話聞き、実習に向けての心構えを固める。</p> <p>進め方：一斉指導および少人数のグループに分かれての個別指導を行なう。教育実習のための実践的指導であるため、欠席を認めない。</p> <p>テキスト：特に指定しない。</p> <p>参考文献：随時、紹介する。</p> <p>評価方法：出席50点、平常点30点、レポート20点。欠席の多い者、意欲に欠ける者には単位を与えない。</p> <p>履修条件：1年次前期の教職専門科目の単位をすべて修得した者のみが履修できる。 教育実習の単位（5単位）は、教育実習Ⅰ（1単位、1年次履修）と教育実習Ⅱ（4単位、2年次履修）からなり、両方取得してはじめて有効となる。</p>		

教育実習Ⅱ	通年 4 単位	2年
教壇実習を中心に		
<p>【担当教員】 藏原 三雪（くらはら みゆき）、清水 康幸（しみず やすゆき）、田中 志帆（たなか しほ）、西村 俊一（にしむら しゅんいち） ねらい：教育実習は、学校における教育実践（実習）に参加することを通じて、中学校教諭としての基礎的能力を養うとともに、教育についての実践的理解を深めることを目標とする。大学で学んだ理論をもとに、経験豊富な教諭の指導を受けて教壇実習を行なうもので、教職課程の総仕上げともいべき位置づけをもつ。</p> <p>授業計画：教育実習Ⅱは、教壇実習（3週間）を本体とし、直前の事前指導と事後指導を含む。事前指導では学習指導案作成や模擬授業などの実践的準備を行い、事後指導では経験交流や反省会を行なう。それらは最終的に冊子『教育実習の記録』にまとめられる。</p> <p>進め方：実習開始前にグループに分かれて「事前指導」が行なわれ、実習終了後は、同じくグループで反省・総括のための「事後指導」が行なわれる。本授業の欠席は認めない。</p> <p>テキスト：特に指定しない。</p> <p>参考文献：随時紹介する。</p> <p>評価方法：出席40点、平常点20点、レポート20点、実習校の評価20点。なお、実習直前であっても、欠席が多い者や意欲に欠ける者は、実習参加を認めないことがある（この場合、単位は取得できない）。</p> <p>履修条件：教育実習Ⅰを履修した者のみ受講が認められる。</p>		